

オペレッタ指導の発表を聞いて

北 村 恵 子

人間は何らかの手段で自己表現をしなければ生きてはゆけないものである。

幼児のあの意欲的に動きまわる能力は、即ち創造活動の芽であると言っても良く、これは人間が本来持っている能力である。

幼児は全身を使って創造活動をする。

音楽リズムにおいては、歌ったり、楽器を使ったり、動いたり、きいたりして自己を表現していく。幼児期の音楽リズム活動に大切なことは、創造の芽をまっすぐ正しくのばしてやることであろう。

オペレッタは、その数多い音楽リズム表現を総合しているものと言える。

ここでオペレッタについて説明しておく。

一般にオペレッタとは、オペラと区別して言われるものである。オペラは、広義に解して、言葉やセリフに音楽がついているものであり、オペレッタは、途中で音楽のつかないセリフなどが多く挿入されているものと言われているが、現在ではミュージカルや他の音楽劇とのはっきりした区別はつきにくく、オペラに到っても、はっきりと定義づけることは難しくなっているようである。

幼児のオペレッタは、全身表現の場として常に保育にその歌劇性を重視されて良いものであり、又幼児自身も喜びのうちに知らず知らずのうちに音楽の芽や他の様々な能力がそこにひき出されてくるものである。自分がその場に参加し、創り出す喜び、又そのものになり切った時の喜びの経験等は、それは何にも増した教育的意義であると思われる。

武居先生発表の「オペレッタ指導について」では、様々な失敗から、幼児との音

楽リズム表現において工夫されたことや、オペレッタ活動を「させた」から「自分からした」にもっていった所に大きな意味があり、素晴らしいことであると思われる。

又この発表をきいて特筆すべきは、普通、市販されているオペレッタ曲集から選んでそれを演ずる園が多い中で、幼児の発達段階に即したものをということ、先生達自らが子どもと一緒に脚色し、作曲し、演じたことである。

中には、物語まで子どもと考え出し話を発展させ脚色、作曲したものもある。

幼児にとっても、自分達や自分の先生の作ったものを自分達で演ずることの醍醐味を充分味わったに相異なる。通園バスの中では、年少、年中、年長を問わず、オペレッタで歌われたあらゆる歌を全員が覚えて歌っていたとき。本当にほゝえましい限りである。武居先生の居られる園の先生達は、ほとんどが学生時代にオペレッタを自分達で作って演じた経験を持つ。それがこういう活動を生み出しているのであり、幼児も自分達で作ったり演じたりした経験がいつか又芽をふぎ、大きな木になってどっしりと自分の中に根をおろし、創造活動の自己充実のささえになってくれるものと信じている。

(上田女子短期大学講師)